

日本関係欧文図書 of 書誌

林 泉 之 介

まえがき

1. 総合書誌と選択書誌
2. 蔵書目録と総合目録

ま え が き

周知のように日本と欧米人との交渉の歴史はかなり古く、16世紀の半ば以来すでに5世紀余りを経過している。その初期に当たる16世紀から17世紀にかけては主としてキリスト教宣教師や航海者たちが、17世紀の鎖国以後は長崎出島の商館を根拠地とするオランダ人が日本に滞在して、それぞれ日本における布教報告書や滞在記、日本に関する見聞録や風聞録などを書いて出版した。また18世紀末から19世紀半ばにかけては、鎖国日本との和親・通商を求めて日本の各地に進出してきたロシア、イギリス、アメリカ、フランスをはじめとする日本遠征隊が、日本との交渉に関する「遠征記」をまとめて出版し、欧米人の極東日本への関心を高めた。19世紀後半にはいってアメリカをはじめ西欧諸国との和親・通商条約が締結されてからは、在留西欧人を主とした対日関心は従来の日本の風物、民俗、政治、経済に対する全般的な傾向から、彼らの職務や要求、あるいは趣味に応じて、日本の歴史や文化、日本語、社会、産業、通商、資源等の調査や研究に分化しはじめるとともに、その著作量にもわかに増加し、その関心や観察の度合いも深化し、専門化して、東洋研究の一部としてのシナ学に比肩しうる日本学＝日本研究の分野が拓けてきた。欧米人の

こうした著作が実際にどれ位の数にのぼるかは定かではないが、日本に関する書目として最初のもつと目されているレオン・パジェスの「日本図書目録」(1869)は、収録範囲である1858年(安政5年)までの日本関係資料約700件を取り上げているところから、当時までの出版点数についてもおよその想像はつく。わが国で日本関係欧文図書を多く所蔵する国立国会図書館、東洋文庫、国際文化振興会の蔵書目録を一わたりみても、上記のパジェスやコルディエの日本書誌にとり上げられた資料のうちかなりのものがこれら三つの図書館に現在収蔵されていることが分る。

次いで明治期にはいと、西欧文化を積極的に吸収しようとした明治政府の政策方針にともなって招へいされたいわゆる「御傭外人」や外交官、宣教師たちが、それぞれにたずさわった仕事や立場から、その活動報告や著作を数多く出すようになった。日欧交渉史の初期を飾るポルトガル、スペイン、イタリア、オランダに代わって、英米仏の技術者、外交官、宣教師などが活躍する時代である。この頃までの、日本関係欧文図書のいわば古典に当たるものは、どちらかといえば“親日家”あるいは“知日家”によるものが多く、これまで数多くの日本語に翻訳出版され、われわれのたやすく目にふれる「異国叢書」、「岩波文庫」や「東洋文庫」に収められている。

日清、日露両戦争期から日英同盟存続期をへて太平洋戦争にかけての40年間前後に欧米で出版された日本に関する図書には、世界の

列強としてにわかに進出しはじめた日本に対する脅威感に根ざした黄禍論や、恐日家による著作が多く目立つのが特徴である。反面、はやくも明治10年代以降から欧文による日本紹介誌として特色のあった日本亜細亜協会の機関誌“Transactions of the Asiatic Society of Japan”（明治9年創刊），“Chrysanthemum”（明治14年創刊）や“The Far East”（明治29年創刊）に執筆陣として頭角を現わしはじめていた日本人（あるいは日系人）による欧文の著作や著書がふえてきているのは、日本人みずからの力で自国を欧米に紹介してゆこうとした強い顕示欲の現われでもあったのであろうか。日本固有の文化が再認識され、一部では国粹主義的な日本の紹介がおこなわれたのもこの時期に当たる。しかし、こうした国際政治や対外戦争のなかで膨張してゆく日本を対象とするものとは別に、芸術、思想、文学の分野での一部の外人の日本研究には、日本人の在来の認識を全く改めさせる影響力を発揮したフェノロサや、タウトやウェリーらによる業績があったことも忘れられない。

戦後になって、日本との戦争に直接参加した欧米の少壮学者たちによる主として社会科学分野における日本研究は、一口にいえば太平洋戦争から占領時代にかけての日本理解と認識の延長線上にくり広げられたもので、内容的には日本近代史とくに明治に関する研究が多い。同時に、日本近代文学の研究や翻訳が盛んなことも特徴の一つであろう。

ごく最近では、日本の「大国化」にともない日本への関心もさらに高まって、アメリカ、イギリス、ソ連、ドイツ、オーストラリア等の大学や研究所には在来のものも含めて日本研究機関や独立の講座の設立が目立ち、日本を訪れる留学生や研究者が増加する一方、外国から招へいされる日本の学者も多い。日本語は昔とあい変わらず国際文化交流の一つの

障壁であるが、日本で刊行される欧文（主として英文）の資料も、官庁・民間のものがいづれも最近も相当多くなってきた。こうした国内刊行の欧文資料はもちろん、欧米で出版された日本関係図書の網羅的収集・整備は上野図書館時代から国立国会図書館創立以来の一貫した取書方針であるが、上野時代の約5,000タイトル（「日本関係欧文図書目録 支部上野図書館旧蔵分」1966年刊に収録）と現在編さん中の「日本関係欧文図書目録1948—1970年収蔵分」の約4,300タイトル、合計およそ9,000タイトルが当館に所蔵され、東洋文庫、国際文化振興会の二大コレクションとともにさまざまな角度から利用されている。

以下本稿は日本関係欧文図書の検索・利用ならびに収集に必要な書目を、当館所蔵本を中心に紹介しようとするのであるが、解説の便宜上第1に、あらゆる主題を含む総合的な日本書誌類を時代順にあげ、第2に上記の主要図書館で出版された日本関係欧文図書の蔵書目録、総合目録について解説し（以上本号掲載）、つづいて第3に主要な主題別書誌につき言及する。なお付録として、選書上利用しうるツールとしての日本研究ガイドや新刊目録をあげ、末尾に最近の欧米の日本研究紹介文献で目にふれたものを列挙する予定である。

1. 総合書誌と選択書誌

a. パジェスの「日本図書目録」

ある分野に関する研究や関心が高まれば、それに対する書目の作成の要求が起きるのは当然であろう。日本に関する西欧語資料の総合的書誌の最初のもはレオン・パジェス（Léon Pagès）の「日本図書目録」Bibliographie japonaise ou catalogue des ouvrages relatifs au Japon qui ont été publiés depuis le XV^e siècle jusqu'à nos jours. Paris, 1859. 68p.（請求記号 016.9152—P134b）

だといわれている。出版の時期はちょうどフランスの東洋植民地化が盛んになりだした第2帝政期のはじめで、東洋学の勃興期に当たる。パジェス(1814~86)は外交官として一時中国に駐在したこともある東洋学者で、序文によればこれは彼の“ヨーロッパ人観点よりみた日本史研究”の最初の成果であって、「日本切支丹宗門史」(1869~70)や「日仏辞典」、未完に終わった4巻から成る日本と西欧諸国との関係史などのさきがけをなすものであった。所載文献資料はタイトルの示すように、1496年刊のマルコ・ポーロの「東方見聞録」のヴェネチア版、バルロスの「アジア志」、耶蘇会伴天連通信をはじめとして、順次出版年代を追うて嘉永・安政の開国期に現われた欧米の日本関係書から、1859年のパジェス自身による日本と各国との修交条約に関する論文まで約700件である。それぞれの文献の所在地、内容に関するノートが付されており、巻末にはフランスを中心としたヨーロッパにある主要日本関係史料のリストが付されている。この書誌はその後の日本書誌の最初の出発点となった点で注目すべきものである。なお本書の覆刻版が1927年、京都の更生閣から、新村出の序文つきで出されている。

b. ウェンクシュテルンの「大日本書史」

パジェスの「日本図書目録」(以下PBと略称)に次ぐ2番目の日本書誌はウェンクシュテルン(Wenckstern, Friedrich von. 1862~1914)の「大日本書史」2巻 Bibliography of the Japanese Empire. Leiden, E. J. Brill; Maruzen, 1895~1907. 2v. (請求記号 016.9152—W468b)で、ヨーロッパ、アメリカ、アジアで出版された日本に関する欧米の図書、論文、地図の分類目録である。ウェンクシュテルンはドイツの日本研究家でロンドンのKegan Paul書店の東洋部に勤務(1890

~1903)、1903年(明治36年)に来日して第五高等学校で1908年(明治41年)までドイツ語を講じた。第1巻の収録範囲はPBに続く1859年から1893年まで、第2巻は1894年から1906年までで、第2巻は来日中、丸善から第1巻と同体裁で出版された。第1巻の巻末には付録として、PBが覆刻されている。分類大綱は次のとおり。1. 日本に関する一般書・雑書 / 2. 書誌 / 3. 定期刊行物 / 4. 旅行記 / 5. 宗教・哲学 / 6. 言語学 / 7. 文学 / 8. 歴史 / 9. 法律 / 10. 経済 / 11. 貨幣・度量衡 / 12. 陸海軍 / 13. 薬学・獣医学 / 14. 教育 / 15. 美術・工芸 / 16. 産業・貿易 / 17. 人種(および文化史) / 18. 博物学(および科学) / 19. 地形学と水路学 / 20. 地文学 / 21. 日本人の日本関係以外の欧文著作 / 22. アイヌ / 23. 琉球・小笠原その他日本周辺の諸島(台湾・澎湖島) / 24. 索引。索引はローマナイズされた日本語名からの索引と、著者索引とから成る。収録文献数は不詳だが、両巻合わせて15,000件はくだらないと思われる。日本の開国期から明治末年にかけての50年余りの間に、日本関係文献がこれだけ多岐な分野にわたって欧米で発表されていることは、この時代に対日関心がいかに急激に高まったかを示すバロメーターとも考えられる。なおこの「大日本書史」(以下WBと略称)にはロシア語文献は除外されているが、ロシア学者の協力参加があれば、Japan Society(ロンドン)の「紀要」に追加収録したい旨言及されている。また、第2巻々末には第1巻収録のPBの目録の補遺がのせられている。

c. ナホッドの「日本帝国書誌」

WBの集録を1906年以降出版分に次いで引き継いだのがOskar Nachod(1858~1933. 日本史西欧史平行発達説をとらえたドイツの日本史家)らの「日本帝国書誌」Bibliographie

von Japan. Leipzig, Karl W. Hiersemann. 7v. (請求記号 016. 9152—N115) で、刊行内容と経過は次のとおりである。

Bd.1: No.1~4019.) 収録年限	1928刊
Bd.2: Nr.4020~9575.		1909~1926年
Bd.3: Nr.9576~13595.	1927~1929および1906~1926の補遺を含む。	1931刊
Bd.4: Nr.13596~18398.	1930~1932および1906~1929の補遺を含む。 Nachodの没後Hans Praesentが増補をうけつぐ。	1935刊
Bd.5: Nr.18399~25376	1933~1935および1906~1932の補遺を含む。 H. Praesent, Wolf Haenisch 共編。	1937刊
Bd.6: Nr.25377~33621	1936~1937および1906~1935の補遺を含む。 H. Praesent, W. Haenisch 共編。	1940刊
Bd.7: Nr.1~3508 3pts.	1938~1943. この巻は Praesent が編集途中で残したものの Photocopy で、米国会図書館に所蔵されている。	

以上収録文献数4万近くの文献集成として驚異に値する。1926年分までの最初の2巻は英文のタイトル・序文がつけられて、Bibliography of the Japanese Empireとして1928年にロンドンのEdward Goldston社から出版されている。(請求記号016. 952—N123bE) またロシア語文献については Matveef と Popov 共編の「日本書誌」(後出)を参考にした旨言及されている。分類構成は、1. 雑誌/ 2. 歴史/ 3. 旅行記/ 4. 宗教/ 5. 法律・行政/ 6. 陸海軍/ 7. 経済/ 8. 芸術/ 9. 文化/ 10. 科学/ 11. 文学/ 12. 言語/ 13. 書誌/ 14. 参考図書/ 15. 植民地となっており、以上の末尾に著者名、日本語(ローマナイズされた)からの翻訳名、雑誌・年鑑の索引が付されている。

以上PB→WB→ナホッド(プレーゼント, ヘーニシュ)の書誌(以下NBと略称)を連結すると1400年代から1943年までの欧文日本関係文献を通覧することができる。この系統に続く日本関係総合書誌としてあげなければな

らないのは“Far Eastern Quarterly”(現在の“Journal of Asian Studies”)に特集される「欧文アジア研究文献目録」の日本の項である。

d. 「欧文アジア研究文献目録」

この書誌は上記雑誌の特集として1936年いらい現在まで、次頁表の変遷をたどって刊行が続いている。雑誌の編さん刊行はアメリカの Association of Asian Studies(全アジア学会)。雑誌、単行書、雑誌記事を含む年刊分類書誌で、分類大綱は、雑誌/総記および雑誌/書誌/宗教・哲学/歴史/伝記/地理/旅行記/経済/農業/産業および労働/財政・貿易/社会科学/海外の日本人/政治・行政/法律/外交/教育/芸術/建築/言語/文学/科学技術に分かれる。

次頁の表のように、刊行形態としては雑誌であるが、最近ではモノグラフとして刊行され、1957年、American Council of Learned Societies と合併して Assn. of Asian Studies に改組されてからは全体の収録範囲も当初の東アジアからアジア全域に広がり、日本の項の収録文献数も1967年分では1000件を超えている。(以上請求記号 Z52—B242)

なお最近、以上の Cumulate 版(Cumulative bibliography of Asian studies, 1941~1965)が著者別4冊、主題別4冊に分け G. K. Hall 社から刊行された。

e. コルディエの「日本書誌」

PB から「欧文アジア研究文献目録」に至る系列外にあって編さんされた日本関係欧文書誌としてあげなければならないのがコルディエ(Henri Cordier, 1849~1925)の Bibliotheca Japonica, 1912. 762p. (請求記号 016. 952—C759b)である。これは同じく彼の Bibliotheca Indo-Sinica とともに、(書誌学者としての)主業績たる Bibliotheca Sinica 全

「欧文アジア研究文献目録」刊行の変遷

収録年度	書 誌 の 名 称	編 者	備 考
1936~40	Bulletin of Far Eastern Bibliography v. 1~5	Earl H. Pritchard	Com. of Far Eastern Studies of American Council of Learned Societies, Washington 刊。索引あり。
1941~45	Far Eastern Bibliography 1941~1945 (1941. 11~1946. 5)	同 上	“Far Eastern Quarterly”の毎号巻末に分載。索引あり。
1946	Far Eastern Bibliography 1946	Gussie E. Gaskill, E.H. Prichard, Cecil Hobbs	“FEQ” 6-3(1947. 5) 221~261p. 索引あり。
1947	Far Eastern Bibliography 1947	同 上	単行書として Ithaca, Cornell Univ. Press から 1948. 6 刊行 84p. 1947. 8~1948. 5 の “FEQ” に分載。索引あり。
1948	Far Eastern Bibliography 1948	G. E. Gaskill, John J. Nolde 他	Cornell U. Pr. から単行書として 1949. 8 刊行。118p. 1948. 8~1949. 5 の “FEQ” に分載。索引あり
1949~1955	Far Eastern Bibliography 1949~1955	G.E. Gaskill 他 1954, 55年分の Gen. editor: Howard P. Linton	“FEQ” 9-4 (1950. 8) から毎年 8 月号(各巻最終号)に一括掲載。1955年分は v. 15-5(9月号)を新たに特集号にあてる。索引つき。
1956~	Bibliography of Asian Studies 1956~	1960年分までの General editor: H.P. Linton 1961: Dorothea Scott. 1962~: Richard C. Howard.	v. 16 (1957) 以降 “Journal of Asian Studies” とタイトル変更。各巻第 5 号(9月号)を書誌の特集号にあてる。索引つき。

5巻の両翼をなすものといえよう。コルディエは元来シナ学者であってフランス—中国交渉史を中心とする業績が多く、この日本書誌をシナ学者の立場から考えて、PBの誤りの改訂ならびに増補版を編さんすることを志している。すなわち古い中国文献に現われる日本(扶桑国)に関する欧米の研究からはじまって、バジェスの収録範囲である1859年までを1870年(ほぼ明治維新の時期)まで延長し、この間における日本に関する資料を年代順に、関係人名や主要事件を見出しにのりまぜながら配列している。したがって成立の上から見ればPB—WB—NB系列が考えられるが、内容の正確さからはPBよりコルディエの日本書誌(以下CBと略称)をとってC

B—WB……とする方がより適切かもしれない。なお同書誌には“使用の便宜上”1870年以後の日本関係欧文主要図書のリスト(著者名順)が補遺として付せられている。1932年に大岡山書店から、1969年にはGeorg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim から reprint 版が出された。

f. ベルリン日本研究所・京都ドイツ文化研究所編「古日本文献目録」(Bibliographischer Alt-Japan Katalog, 1542~1853.)

これはドイツならびに日本の主要図書館に所蔵する、1542年のポルトガル人による日本発見から1853年の日本の開国に至る間にヨ—

ロッパで印刷刊行された日本関係欧文文献にそれぞれの所在を記入したいいわゆる総合目録で、ベルリン日本研究所 (Japaninstitut in Berlin) 主事 Dr. F. M. トラウツ教授の編さんならびに尽力にかかる。全体で415p.、収録書籍数は1624。その四分の一はWBやCBに収録もれのものであるという。この書誌の原稿は1926年～1930年にかけてトラウツ教授の手で編さんされたが、1935年に京都ドイツ文化研究所に移管され、京都帝大をはじめとする日本の18の大学附属図書館、研究所に所蔵される日本関係欧文古文文献について記載をおこなって内容を充実したうえ、ドイツ文化研究所において1940年に印刷刊行された日独両国学界の共同事業である。

《ソ連における日本書誌》

以上とりあげたのは主として欧米諸国の書誌学者によって編さんされた日本関係書誌であるが、これらには、ロシア語による文献はあまり見当たらない。NBには後述の Z. N. Matveef, A. D. Popov 共編の「日本書誌」(1923)を参考にしていくつかのロシア語研究文献を記載しているが、欧米のものに比べロシア語文献が意外に少ないのは、語学的制約によるためか、それともソ連の日本研究を意識的に除外あるいは軽視しているためであろうか。しかし、今次大戦後に限っても、ソ連学界の日本研究には注目すべき成果があいついで現われている。コンラド博士 (N. I. Konrad) の日本古典文学研究やフェリドマン (N. I. Feldmann) の日本語辞典の編さんやグルスキーナ (A. E. Gluskina) の日本近代文学の研究など、いずれも長年にわたる研究の成果であり、19世紀以来東方学者の数も、欧米諸国に比して決して劣らなかつたのである。以下主として西村庚氏による「ロシアの日本研究と露文書誌」(「共産圏問題」7-3, 4:

1963. 3, 4) によってロシア人編さんの日本書誌について概観する。

g. メジヨフの「日本書誌篇」

旧ロシアを代表する標準的日本関係書誌としてあげなければならないのは19世紀後半の書誌学者メジヨフ (Mezhov, Vladimir Izmailovich) の編さんした「アジア書誌」(Библиография Азии (全3巻, 1891—1894) の第1巻第2部 No. 3104~3439 に収録された“日本”篇である。(請求記号 016.915-M617b) 収録件数は336で、収録資料は18世紀初頭から1880年代末のロシアにおける日本研究報告、論稿、訪日ロシア人の記録・報告をはじめ、西欧諸国の研究成果のロシア語訳本。項目の整理法は分類に独自の方式を使い、索引もないので検索には不便である。その後の旧ロシア時代の書誌としては、1923年のマトヴェーエフ、ポポフ共編の「日本書誌」の出版に至るまで、まとまった目ぼしいものは見当たらない。

h. マトヴェーエフ、ポポフ共編「日本書誌」

10月革命後のソ連政権下においてはじめてまとめられたのは E. G. スバルヴィン監修、Z. N. マトヴェーエフ、A. D. ポポフ共編の「日本書誌」(1923年)である。本書はウラジヴォストークの東洋学院(革命後「極東大学」に改組、日本学部がある)から出版されたので、浦汐版「日本書誌」とも略称される。136pの小冊子であるが、第1部(117p)と第2部(13p)とに分かれ、合わせて2,100件を収めている。(請求記号 016.952-M445b) 末尾に著者名索引と本文所収事項の出典を示す出版機関名の略語表がある。第1部には旧ロシアの日本関係資料(朝鮮、台湾、カラフトを含む)を網率的に収録、国際十進分類法

によって分類されている。小計1,845件のうち、歴史と地理795件、社会科学523件、言語学152件、文学98件その他となっており、これらの数字は19世紀末から革命前後までのロシアの、日本に対する関心度を示すものといえよう。第2部には革命前後(1915~1922)における日本研究の成果と、全巻に対する補遺計255件を収めている。両々あいまって、前項メジヨフの「日本書誌篇」の収録範囲である18~19世紀末につながる革命期までの日本関係書誌である。日露戦争に関する戦記、回想録の類が多く、また日本との接点であるカラフトや千島の民俗、地誌、資源に関する論文や著書が多いのは当時として当然の勢いであろう。

i. ソ連科学アカデミー編「日本書誌」

二つの大戦をはさむ数十年間のソ連の日本研究は軍事、外交、政治を中心としたいわば「戦略的」日本研究であったが、今次大戦後間もなく、ソ連の学界においてはふたたび極東、シベリアに関する文化的関心が高まるとともに、日本を含む東洋関係の研究成果がいくつかで発表されるようになった。ことに1950年代半ば頃から日ソ文化交流の波に乗じて急速に展開された日本の文学、芸術、科学技術に関する研究成果の発表には、本質論にもとづいて実証的な検討を積み重ねたものがふえてきた。たとえば歴史研究にしても、古文書の研究から発足するという慎重な態度がみられるのもその特色の現われであろう。

1959年、ソ連科学アカデミーのアジア民族研究所では、M. I. ルキャノワ(経済)、K. T. エイドッス(史学)、A. E. グルスキーナ(文学)をはじめとする日本学者と書誌学者が提携して、1917年から1958年に至る日本研究成果をまとめた「日本書誌」の編さんに着手し、1960年刊行のはこびに至った。ソ連科学アカ

デミー編「日本書誌 1917~1958」327p. がこれである。(請求記号 016.915—A313b) 項目の配列は18項目に分類し、巻末に著者索引が付されている。その内容は次のとおりである。

1. 日本に関するマルクス・レーニン主義理論	124件
2. ソ連の党および政府要人の日本観	44件
3. 世界およびソ連労働運動界首脳部陣の日本観	128件
4. 総記、書誌類	186 //
5. 地理学、人種学	217 //
6. 経済	1053 //
7. 哲学	4 //
8. 歴史	987 //
9. 日本の軍国主義とファシズムならびにその帝国主義的侵略	1735 //
10. 対外政策	355 //
11. 国家と法律	27 //
12. 宗教と教会	12 //
13. 軍事力	271 //
14. 文化と科学	152 //
15. 文学	570 //
16. 出版	39 //
17. 言語	193 //
18. 芸術	153 //
	計 6,249 //

なお上記「日本書誌」の前篇をなす旧ロシア期における日本研究(1734年~1917年刊行分)はこれ以前の書誌をもとに増補集大成して1965年に刊行されて、1917年~1938年分収録の書誌と姉妹篇をなす。378 p. (請求記号 016.952—A313b) 分類法は革命後分とほぼ同一の方式をとっている。

1. 総記、書誌	186件
2. 地理、民族	784 //
3. 経済	1,341 //

4. 哲学, 倫理	11 //
5. 宗教	154 //
6. 歴史	748 //
7. 対外政策	557 //
8. 国家と法律, 憲法	49 //
9. 軍事	771 //
10. 文化と科学	297 //
11. 出版	50 //
12. 文芸, 文学研究	539 //
13. 言語	84 //
14. 芸術	143 //
15. ロシアにおける日本学	172 //
計	5,850 //

以上の二つの書誌の分類項目に表われた数字をみても、旧ロシア以来の日本研究の動向はほぼ察知できるし、政治、外交、軍事、経済に次いで歴史や文学もしだいに重視されるようになっており、総合的に日本への関心度がかなり高いことを示している。

(なお以上の二点は「10月革命50周年記念日ソ関係図書総覧1917～1967」岩崎学術出版社 昭38にも主要なものが掲載されている。)

◀選択書誌▶

以上述べてきた総合的な欧文日本関係書誌に対して、大学研究生や日本研究をこれから志す人たち、あるいは図書館備付け用の参考図書として編さんされた選択的な日本書誌の代表的なものとしてあげられるのが次の四点である。

- 1) Borton, Hugh, Serge Elisséeff, E. O. Reischauer 共編
A selected list of books and articles on Japan in English, French, and German. Washington, 1940. 142p. (請求記号 016.9152—B739s)
- 2) Borton, Hugh, S. Elisséeff, William

Lockwood, John Pelzel 共編
A Selected list of books and articles on Japan in English, French and German. Cambridge, Mass., 1954. 272p. (請求記号016.952—B739s)

- 3) 東洋学インフォメーションセンター編
A selected list of books on Japan in Western languages, 1945～1960. Tokyo, 1964. 74p. (請求記号 016.952—T756s)
- 4) Silberman, Bernard S. 編
Japan and Korea; a critical bibliography. Tucson, 1962. 120p. (請求記号 016.952—S582j)

1)の収録範囲は人文・社会科学部門に限られており、分類大綱は1. 書誌, 2. 参考図書, 3. 定期刊行物, 4. 地理, 5. 歴史, 6. 経済, 7. 行政と政治, 8. 社会と民俗, 9. 教育とジャーナリズム, 10. 神話, 宗教, 哲学, 11. 言語, 12. 文学, 13. 芸術となっている。記載の各資料にはごく簡潔な、キャッチ・フレーズ式の解説がつけられている。収録件数 842 件。2)は1)の改訂増補版で収録件数1781。3)は2)の続篇として編まれたもので約1000タイトルを収録。分類体系は、1), 2)をほとんど踏襲しており、2)と3)を併用すれば、欧文日本関係資料の基本的なものを収集するためのチェック・リストになる。三者のいずれにも、それぞれの資料に対する書評記事(誌(紙)名, 巻号, 批評者)をのせて、利用者の便を図っているのが特徴である。

4)は編集方針として研究家ならびに一般研究家を対象に、なるべく入手しやすく、しかも権威ある内容の日本(および朝鮮)関係欧文図書——主として英文——を各分野について紹介することをかけており、3)が1953年までの内容であるのに対し、4)は1960年代初頭までの資料が収録されているから、いわば“最新の”選択的書誌といえる。分類大綱は

最初に JAPAN として入門書、書誌、雑誌等の総記部門をかかげ、以下国土と国民、言語、歴史、宗教・哲学、芸術、文学、政治、社会、教育、経済、人口の順に総計1,615件の標準図書をかかげて夫々に解説を付している。書目とはいえ、解説部分が多く、日本研究ガイドブックとしても有用である。

2. 蔵書目録と総合目録

1. において日本関係欧文書誌の代表的なものを概観したが、これらに掲げられた資料をいざ実際に利用するためにはかなりの困難が予想されよう。さいわい日本においても、日本関係欧文図書を比較的多く収集・保存している国立国会図書館や東洋文庫、国際文化振興会がそれぞれまとめた蔵書目録を刊行しているので、以下それぞれの特徴をあげてみよう。それらを発行年順に列挙すれば次のとおりである。

1) 国際文化振興会図書室編

Catalogue of the K.B.S. Library ; a classified list of works in Western languages relating to Japan in the Library of Kokusai Bunka Shinkokai. Tokyo, 1937. 203p. (請求記号 016.952—K79c)

2) 東洋文庫編

A classified Catalogue of books on the section XVII. Japan in the Toyo Bunko acquired during the years 1917~1956. Tokyo, 1957. 304p. (請求記号 017.1—T756c)

同上 Author index. 1959. 128p. (請求記号 017.1—T756c)

3) 国立国会図書館所蔵日本関係欧文図書目録 1948.4~1962.12 収蔵分 1963. 306, 74p. (請求記号 016.952—K792c)

4) 国際文化振興会図書室編

Catalogue of the K.B.S. Library ; a classified list of works in Western languages relating to Japan in the Library of Kokusai Bunka Shinkokai acquired during the years 1935~1962. Tokyo, 1965. 316, 124p. (請求記号 016.952—K79c)

5) 国立国会図書館所蔵日本関係欧文図書目録支部上野図書館旧蔵分 (1872~1960) 1966. 166p. (請求記号 016.952—K79cu)

1)は1934年に創立の財団法人国際文化振興会が、設立当初から2年間にわたって収集した約5,000冊の日本関係欧文図書コレクションの目録。同会図書室設立当初の収集・指導には元東洋文庫長石田幹之助氏が尽力した。蔵書内容は自然科学を除くすべての分野にわたるが、歴史、文学、芸術、宗教などの人文部門がとくに充実している。その後の増加分については、1965年に新版4)が刊行されるまで、随時増加図書目録を出していた。この目録には、日本に対する学術研究の主要な学会報告である日仏会館紀要、日本亜細細協報報告や東亜自然学民族学ドイツ協会報告、日本協会紀要などの記事が分類収録されているので、4)が刊行されたのちも利用価値は残っている。(4)ではこのような雑誌記事は落とされた4)は1935~1962年末までの全収蔵図書約5,000タイトルを収めている。1)には著者索引、4)には著者書名索引を付す。

2)は東洋文庫洋書分類目録シリーズの一巻(第17門)として日本関係欧文図書をまとめたもので、当文庫の核心となったモリソン文庫中の同関係書を主体とし、その他1956年までの購入、寄贈分をまとめた分類目録。(著者)書名索引は別冊で刊行されている。収録タイトル数は概算して4,500。蔵書構成をみると人文部門に重点がおかれているようで、とくに宗教関係では15,6世紀の耶穌会通信などの

稀観書が多い。

5)は旧帝国図書館(戦後国立国会図書館支部上野図書館)で収集した約5,000点を収録。その大部分が“日本函”として現在もまとめて収蔵されているが、蔵書の内容は全般、全時代におよぶ。とくに日本で刊行された日本人による欧文図書、政府出版物を多く含んでいるのは納本制度に負うところが大きい。著者索引、件名索引を付す。3)は1948年～1962年に国立国会図書館が収集した2,300点を収録した予備版で、この分を含み1948年～1970年までの収蔵分約4,300点の蔵書目録を現在編さん中である。

なお、総合目録としては、国際文化会館図書室編集の Union catalog of books on Japan in Western languages. 543p. が1967年に出された。(請求記号GB 1-3)これは上記三館の蔵書目録を一本にまとめたものに、同会館図書室の蔵書その他若干を収録している。いずれも東京所在のものである。所収点数はおそらく7～8,000タイトルにのぼるであろうが、これに1,000～2,000タイ

トルほど加えた概略10,000タイトル余がおそらく日本に現存する日本関係欧文資料の概数だと考えてよいであろう。なお上記三館以外で所蔵する日本の特殊主題に関するコレクション——たとえば上智大学のキリシタン文庫や東大史料編纂所の日本関係海外史料目録等については別項でとり上げる予定である。

以上日本関係欧文書誌を通観して感ずることは、日本自体がこのような書誌を作成していないことの不便さで、またそれぞれの書誌分類方式がまちまちなため、一定主題の資料の検索がかなり困難である点である。日本人によるこうした書誌(ないしは検索ツール)の作成が望まれる。また上記のように、近来在ヨーロッパの史料のフィルム化や目録作成がおこなわれつつあるが、日本に現存する日本関係欧文資料はおそらく全体の三分の一にも満たないであろうから、日本における対外交渉史その他の研究分野での未開拓部分もかなり広いであろうことがうかがわれる。

(未完)

(はやし・こうのすけ:参考書誌部人文課主査)

(48頁よりつづく)

重光葵 外交回想録 七 日ソ衝突、満洲・上海事変 (pp. 103—138) 毎日新聞社 昭和28 (319. 1—Si291g)

歴史学研究会編 太平洋戦争史(1) 満洲事変 東洋経済新報社 昭和28 268 p (210. 75—R18t)

英修道 満洲事変から日本の国際連盟脱退まで (日本外交学会編 太平洋戦争原因論のうち pp. 231—270) 新聞月鑑社 昭和28 (210. 75—N684t)

青木得三 太平洋戦争前史 第一巻 第四篇 上海事件前後 学術文献普及会 昭和28 (210. 75—A592t—g)

日本国際政治学会太平洋戦争原因研究部編

太平洋戦争への道 第2巻 満洲事変 第五章 第一次上海事変 朝日新聞社 昭和37 (210. 75—N685t)

同上 太平洋戦争への道 別巻 資料編 上海事変 (pp. 187—207) 朝日新聞社 昭和38 (210. 75—N685t)

小林竜夫、島田俊彦解説 現代史資料7 満洲事変 みすず書房 昭和39 670 p (210. 7—G29)

同上 現代史資料 11 続満洲事変 昭和40 1024 p

本庄繁 本庄日記 原書房 昭和42 426 p (210. 72—H643h)